

マスコミ

相変わらず左 藤原口(京都大 学准教授)の筆 が冴えている。 「一億日知化は 一億総通知だろ うが著者のせい。」

帯のついた『テ レビ的教養』 雑誌『考える人』(新潮 社)に連載したものをまと めた後著は、漢字制限によ る使い分けが、統計調査の 数字として表出し世論の変 質を生んだという。大新聞 の世論調査がいかに危うい ことを改めて説く一方、世 論を良質な「輿論」に導こう としても面白く。

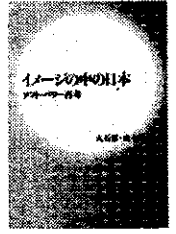
大宅壮一の「一億層白痴 化」(一九五七年)発言は、 わずか五秒程度しかテレビ 受像機が普及していない時 代、テレビ的機能を見通し た言説として知られている。 左藤の前著はそのテレ ビ文化の 대중化、大衆文化 の背景に占領政策が見事に 反映されていること、また し始めている。

そのテレビが爆発してい る中国メディア界を描いた のが渡辺浩平『変わる中国 変わるメディア』(講談 社現代新書)。一党独裁で はあるにしても、視聴率争 いから急激な商業化がテレ ビを侵食する一方、党機関 紙の読者離れ、一党多様な メディア状況が出現してい る。衛星放送やインターネット が中国社会を変えつつ

ニッポン。漫画やコミック、 アニメだけがニッポンのソ フトパワーなのか。大石裕 山本信人編著『イメーシ の中の日本』(慶應義塾大 学出版会)は靖国問題、北 朝鮮ミサイル・核、日本外 交などを通してメディアに 現れた日本の自己イメージ

主張に賛同するわけにもい かない。粗上にあがる問題 点もこれまで指摘されてき た枠で論じている。むしろ 『戦争絶滅へ、人間復活へ 九三歳・ジャーナリス ト』(岩波新書)を「遺言 みたいなもの」として上梓 したものの、たけじの反戦、 平和の訴えがより強く響く のではないだろうか。

ニコラス・ラスキン『戦 争特派員 ゲルニカ爆撃を 伝えた男』(塩原通緒訳、 中央公論新社)の主人公は、 ザ・タイムズの特派員ジョ ーシ・ステビア。舞台はエ チオピアとスペイン。そし て平敷安常『キャバになれ なかったカメラマン・ペト ナム戦争の語り部たち』 (上・下、講談社)は、A



と他国の日本イメージを再 考している。 同書が新聞メディアを主 として分析対象としたのに 対し、萩原滋編著『テレビ ニュースの世界像―外国関 連報道が構築するリアリテ イ』(勁草書房)は映像や「人 の語り」といったテレビ独 自の特徴にも焦点をあて、 いかなる世界像をもたらし ているか、教えてくれる。

「第五の壁」といわれた 四角いブラウン管もいまや 薄型の液晶、プラズマが主 流となり、二〇一一年には アナログ放送が止まる。わ れわれは再び「星の荒野」 に向かうのだろうか。 では、その送り手につい てはどうなっているのだろ うか。

人は何を求めて近代化を 遂げ、何を得たのだろうか。 (すずき・ゆうが氏)上智 大学文学部教授・新聞学専 攻

麻生化するニッポン

漫画やアニメだけがソフトパワーなのか

鈴木雄雅

読者人
08/12/26
No.2769
(P.8)

ある状況を詳述している。 北京五輪のメディア狂想劇 を思い出しつつ読むことを お薦めする。「ふたつの顔、 ふたつのメディア」(終章) は当分続くだろう。中国と 対照的と言えないにしても も、「世界の市民が創るメ

ディア」を探るのが、松浦 さと子・小山節人編著『非 営利放送とは何か』(ミネ ルヴァ書房)である。

とで、支持率二割と 低派しながら、麻生化する だが、必ずしも全て著者の

ディア」を探るのが、松浦 さと子・小山節人編著『非 営利放送とは何か』(ミネ ルヴァ書房)である。 ナリスムの実態と批判は一 般読者受けするかも知れな

うか。 菊池良生『ハプスブルク帝 国の情報メディア革命 近代郵便制度の誕生』(集英 社新書)は十六世紀に遡る 情報インフラの成立を描い ている。